

## 趣味およびグループ活動からみた高齢者の日常生活実態 — 高齢者の地域生活保障に関する研究 その2 —

櫻井 康宏\*      三島 涼子\*\*

### Actual Conditions of the Daily Living for the Aged from the Viewpoint of the Hobby and the Group Activity — A Study on the Assurance of Community Life for the Aged Part 2 —

Yasuhiro SAKURAI and Ryoko MISHIMA

(Received Aug. 30, 1996)

This paper aims to clear actual conditions of the daily living for the aged from the viewpoint of the hobby and the group activity in addition to the job, the housework and the daily out-going. Therefore carried out a field survey at three areas in Fukui City. First areas is an old town area developed in early post-war days, Second areas is a newly town area developed after 1970 and Third area is a suburban area. Some conclusions are as follows;

1. Hobbies and group activities of the aged have continuity throughout per-aged stage.
2. The daily living of the old-aged (over 75 years old) has a tendency to specialize in two types; the one is positive type and the other is negative type.

#### 1. はじめに

我が国では1994年に高齢化率が14%を超え、いよいよ「高齢社会」に突入した。これまでも高齢化対策として、様々な施策がとられてきたが、それらは主に寝たきりや痴呆症の高齢者の為のものであった。しかし、「高齢者の約7割が健康な在宅者である」という事実から、多方面にわたる要求が生じることは容易に想像がつく。

高齢者が老後の人生をどう生きるかという事は、今後の課題の一つでもある。「生きがい」をもって生活することは望ましいスタイルであるが、それを支援するためのシステムは未だ充分とは言えない状況である。

そこで、高齢者が気軽に集うことの出来る空間の必要性を、システム構築の一部を担うものと考え

---

\* 環境設計工学科

\*\* 大学院環境設計工学専攻

える。空間の必要性をとらえる第一段階として、高齢者の日頃の生活実態を把握することにする。そのことは自立した生活、また生きがいのある生活を送る為の諸条件を明らかにすることにつながるものと考ええる。

本論文では、この点に着目して進めていくことにする。

## 1-1. 調査の概要

1995年11月～12月にかけて、福井市において、アンケート調査を実施した。調査対象地区は、福井市の中心市街地2地区（宝永1丁目、照手2丁目）、新市街地3地区（新田塚2丁目、高木中央2丁目、種池町）、周辺市街地2地区（大和田町、川合鷺塚町）の計7地区を抽出し、各地区から高齢者世帯を無作為抽出したものである。配布総数247世帯、340人に対して、最終有効回収数は226世帯、310人である。なお、1993年における各地区の高齢化率は、中心市街地（29.8%、31.2%）、新市街地（16.7%、11.4%、11.2%）、周辺市街地（24.3%、23.9%）である。

質問項目は、世帯票では、家族構成、住宅の取得方法とその時期、住宅面積と総室数、さらに同居世帯には親世代、子世代の室数をきいている。また、個人票に関しては、年齢や職業などの属性、ADLの状況、住まいの中での日頃の生活について、地域の中での日頃の生活について、趣味活動、グループ活動、生きがい、趣味活動の今後の希望について質問した。詳細については各項目においてそれぞれ触れることにする。

## 2. 世帯および対象者の概要

### 2-1. 家族構成について

家族構成は、全体では「単身同居」が34%と最も高く、続いて「高齢者のみ世帯」が31%、「夫婦同居」が27%、「その他（拡大家族）」が8%となっている。これを地区別でみると、中心市街地では「高齢者のみ」および「単身同居」が、新市街地では「高齢者のみ」および「夫婦同居」が、周辺市街地では「その他」の割合が相対的に高くなっている（図1参照）。

### 2-2. 住宅の状況

①対象者の住宅取得方法は、全体でみると7割近く

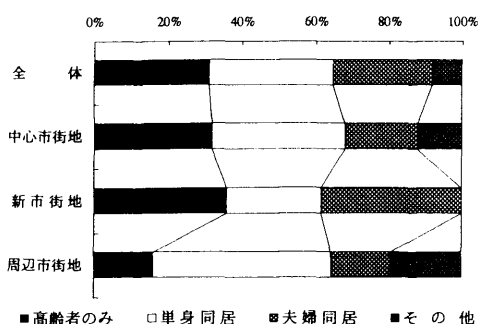


図1 地区別家族型

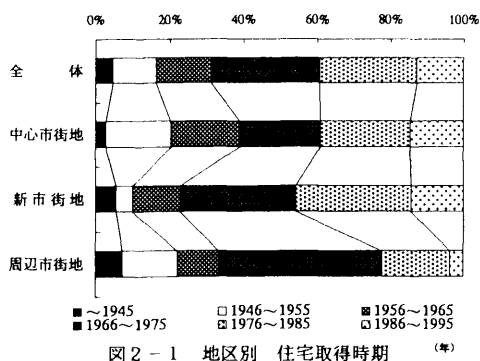


図2-1 地区別 住宅取得時期 (年)

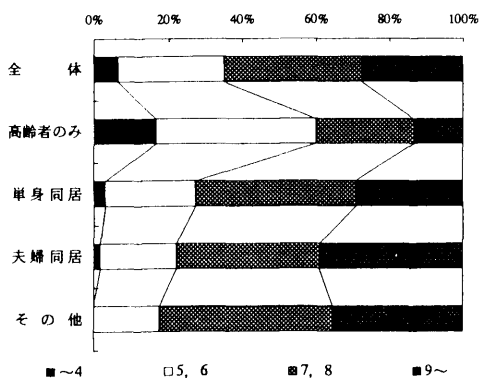


図2-2 家族型別 住宅総室数 (室)

が「新築」しており、「建て替え」は2割強、「購入した」と「借りた」で1割弱となっている。地区別では、中心市街地と新市街地で「新築した」が圧倒的に多く見られる一方、周辺市街地では「建て替えた」が半数以上となっている。

②住宅を取得した時期は、周辺市街地で1966～1975年の期間の取得が多い。近年（1986～1995）をみると、中心市街地と新市街地も共に15%近くになるのに対し、周辺市街地では4%にも満たない（図2-1参照）。

③住宅面積と総室数は、いずれも中心市街地、新市街地、周辺市街地の順に面積が増加し、同時に室数も増える傾向にある。周辺市街地では9室以上ある住宅が4割を占めている。

④家族構成と住宅面積および総室数の関係を検討すると、住宅面積では「高齢者のみ世帯」で150㎡未満が8割近く占めるのに対し、「単身同居」で6割、「夫婦同居」で7割、「その他」の同居で8割が150㎡以上であり、高齢者世帯と同居世帯との住宅面積の差が明らかになった。総室数にも同様の傾向がみられ、高齢者世帯に比べ同居世帯の方が多くなっている（図2-2参照）。また、同居世帯について親世代、子世代、親世代・子世代共用の部屋数を、家族構成別に比較すると、親世代（図2-3参照）では「単身同居」の場合1室、「夫婦同居」の場合、2室が5割を超えている。子世代（図2-4参照）では「単身同居」および「その他」で7割前後が3室以下なのに対し、「夫婦同居」では6割が4室以上となっている。親子共用の部屋（図2-5参照）は1室または2室が大半を占めている。これらのことから、高齢者の生活空間としては2～4室程度が一番多いことがうかがえる。

### 2-3. 対象者の概要

①対象者に性別、年齢をきいたところ、男性が45%で、女性が55%となった。年齢別には前期高齢者の場合、男性が44%で女性が56%となり、女性の方がやや若い結果となった。これを地区別でみ

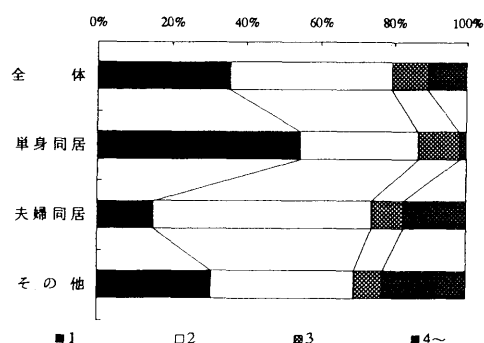


図2-3 親世代の部屋数 (室)

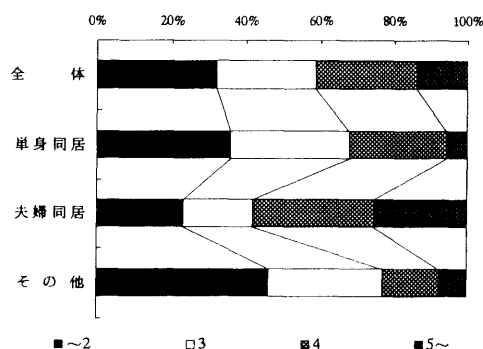


図2-4 子世代の部屋数

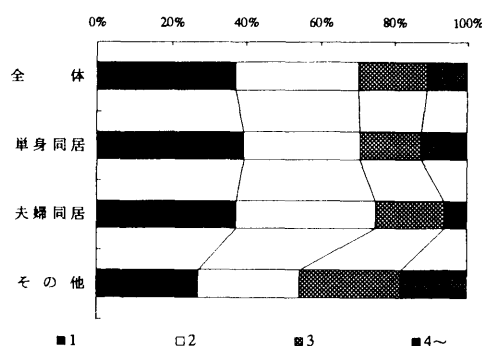


図2-5 親子共用の部屋数 (室)

表1 地区別 対象者の概要

	中心市街地	新市街地	周辺市街地
地区別総数(人)	128	133	49
男 性	46.1%	47.4%	36.7%
女 性	53.9%	52.6%	63.3%
65～74歳	55.5%	69.9%	45.8%
75歳～	44.5%	30.1%	54.2%
現 職	16.5%	10.8%	7.1%
再就職したが退職	13.2%	23.1%	12.0%
一度退職し無職	26.4%	29.2%	21.4%
自営・農林漁業	20.7%	15.4%	47.6%
無 職	23.1%	21.5%	11.9%

てみると、中心市街地、新市街地で前期高齢者が、周辺市街地では後期高齢者の割合が高くなっていて、特に新市街地ではその差が顕著である（表1参照）。

②学歴は、全体では中学（旧小学校）卒業が45%、高校（旧中学校）卒業以上が55%となっており、前期高齢者では高校卒業以上が7割近くであり、高齢者の高学歴化をうかがわせるが、学歴は加齢と共に低下していくのが特徴である。

③2-1. で述べた家族構成を年齢別で改めて見直すと、65～69歳で44%であった「高齢者のみ世帯」は、75歳以上では28%にまで減少して、「単身同居」が増加しており、高齢化に伴い同居する割合が高くなっている。また男性の方が、女性よりも「高齢者のみ」で暮らしている割合が高く、女性では特に後期高齢者において「単身同居」が目立っている。

### 3. 就労実態およびADLの概要

就労実態については、就業の経緯と退職の経緯、最初の退職前の職種、再就職の場合においては再就職後の職種、現在の1週間の勤務日数と1日の勤務時間の面から検討した。また、ADLについては、健康状態、聴力、視力、入浴、歩行、自転車、自動車についてそれぞれどの程度可能かを判断したものである。

#### 3-1. 就労実態について

①「現役」と「再就職」「自由・自営・農林漁業」を合わせた、現在も働いている人の割合は全体で3割強であるが、性別では男性31%、女性19%となっている。また年齢別では前期高齢者が26%、後期高齢者が22%となっている。前期高齢者では「再就職した」割合は高いが、後期高齢者では「自由・自営・農林漁業」が多く、高年齢になるほどその割合は増加する傾向にある（図3-1参照）。

②家族型別では、「夫婦同居」「その他」において現役率が高く、それぞれ3割を超えている。また、この2つの家族構成は「自由・自営・農林漁業であった（または『ある』）」の割合も27%、35%と相対的に高くなっている。「単身同居」では、現在も働いているものが16%と極めて低くなってお

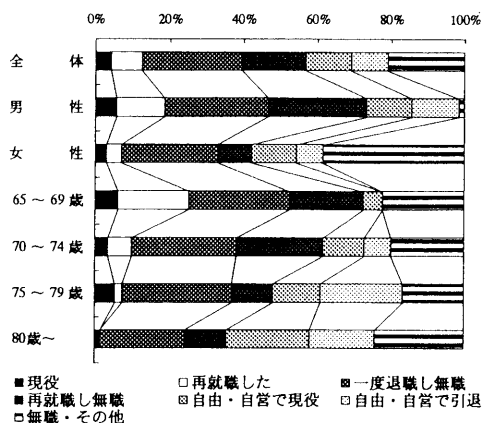


図3-1 性別、年齢別 就労実態

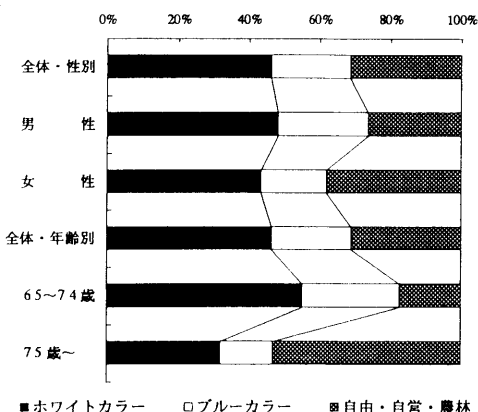


図3-2 退職前の職種

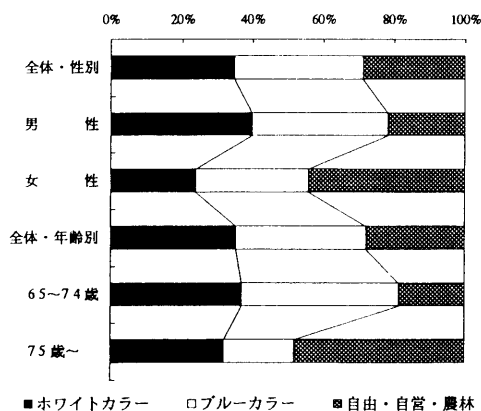


図3-3 再就職の職種

り、それは特に女性で顕著である。さらに年齢別では、前期高齢者で「夫婦同居」「その他」の場合、現役率が36%と高くなっているが、後期高齢者では「夫婦同居」の場合での現役率が低下する。「自由・自営・農林漁業」の割合が、どの家族構成でも高くなっているのも後期高齢者の特徴である。

③退職前および再就職の職種は、退職前だと、男性に比べ女性は「自由・自営・農林漁業」が多い。また年齢別でも、前期高齢者で「ホワイトカラー」が55%と多いのに対し、後期高齢者は「自由・自営・農林漁業」が53%と多かった(図3-2参照)。再就職の職種では、退職前に比べ男女とも「ブルーカラー」が増え、また前期高齢者でも同じように「ブルーカラー」がかなりの増加をみせている(図3-2, 図3-3参照)。

④勤務日数、勤務時間は、男性よりも女性が、前期高齢者よりも後期高齢者の方が、週5~6日の長い日数を働く場合が多くなっている。勤務時間は、男性と前期高齢者の方が、5時間以上働く割合が8割前後と高くなっている。

### 3-2. ADLの概要

①健康状態:「病気がちである」「ふせていることが多い」とするものは全体の2割強であるが、後期高齢者では4割を超えている(図3-4参照)。

②聴力・視力:「聞きづらい」や「あまり聞こえない」とするものが全体の約4割であるが、後期高齢者ではそれは6割に達する。また、視力に関しては「眼鏡をかけていないと見づらい」とするものは1割程度となっている。

③歩行:全体としては95%が「自分で出来る」としているが、特に後期高齢者になると15%が「補助具が必要」あるいは「介助が必要」としている。

④自転車:男女の違いが大きく男性の8割強が「今も乗っている」と答えたのに対し、女性の過半数が「今は乗らない」「昔から乗らない」としている。また後期高齢者で、「今も乗っている」とするものは半数以下となっている(図3-5参照)。

⑤自動車:自転車と同様、男性の6割が「今も運転している」としているのに対し、女性の9割は「昔から運転していない」としている。また後期高齢者で「今も運転している」とするものは17%で、自転車よりもさらに低下しており、高齢者の活動範囲を規定している要因と考えられる(図3-6参照)。

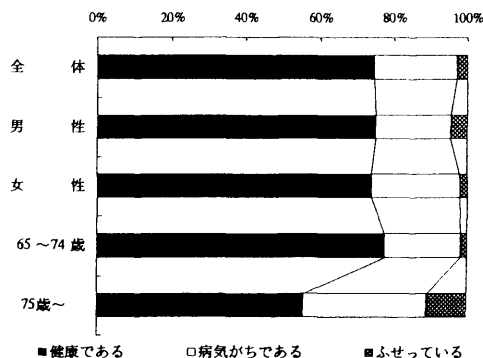


図3-4 健康状態

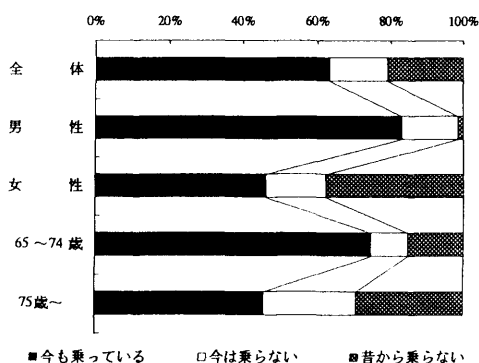


図3-5 自転車

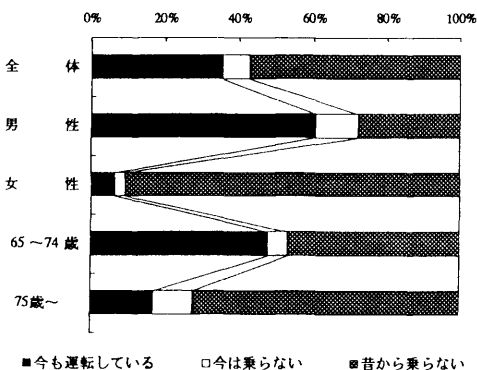


図3-6 自動車

#### 4. 日常生活の概要

日常生活行為を、家庭内と地域内に分け、家庭内の日常生活については、家の中での日中の主な居場所、「料理」「庭や家の手入れ」など9項目についての実施頻度、よく来る友人関係をきいている。また、地域内における日常生活では「病院」「近くでの買い物」など8項目についての外出頻度、よく訪ねる友人関係、地域行事への参加、公共施設への外出をみた。

##### 4-1. 家庭内における日常生活

①「毎日」行っている割合が高いのは、「新聞を見る」83%、「料理」38%、「本や雑誌をみる」38%、「子世帯との団らん」35%でいずれも高い割合を示している。しかし、「料理」と「子世帯との団らん」においては「しない」の割合も高く、「毎日」と「しない」が両極に分化している。「週1回以上」行っている人の割合が高いのは「新聞を見る」84%、「本や雑誌を読む」59%となっている（図4-1参照）。

②性別、年齢別でみると、その違いが最も大きくあらわれているのは「料理」（図4-2参照）で、男性では「週1回以上」行う人は16%しかおらず、女性の70%に比べかなり低くなっている。女性は後期高齢者であっても50%と高いが、単身同居や夫婦同居など他の家族がいると、行う割合は減少する。また、前期高齢者よりも後期高齢者の方が「毎日」行う割合が高くなるのは、女性でみると「本・雑誌を読む」（前期高齢者37%、後期高齢者39%）、「子世帯との団らん」（前期高齢者33%、後期高齢者45%）であり、男性では「趣味活動」（前期高齢者26%、後期高齢者36%）となっている（図4-3参照）。

③家族構成では、高齢者のみ世帯と単身同居で、男女ともに、「子世帯との団らん」を「ほとんどしない」とした人が7～8割占めている。しかし「趣味活動」や「本・雑誌をみる」に関しては、「週1回以上」が6～7割となっている。

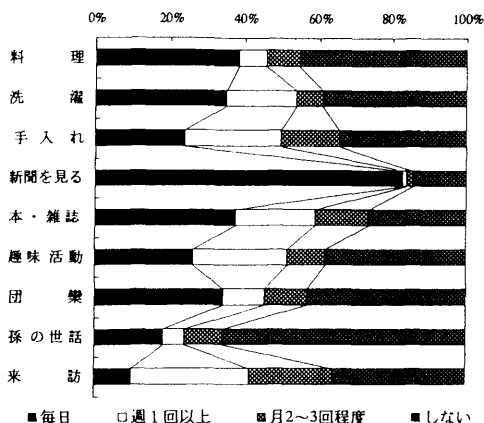


図4-1 日常生活行為

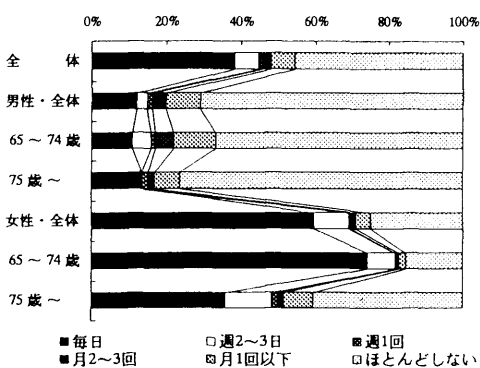


図4-2 日常生活行為（料理）

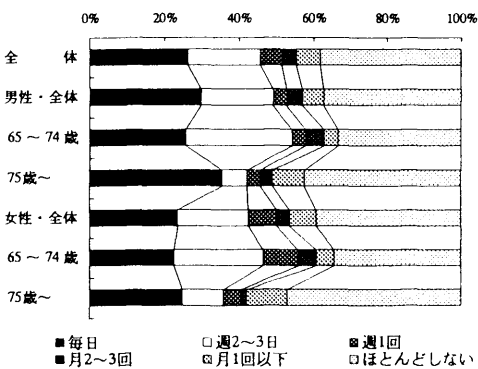


図4-3 日常生活行為（趣味）

表2 家事と趣味の関係

男性／手入れ	全	体	前期高齢者	後期高齢者
家事○・趣味○	28.8%		33.3%	22.6%
家事○・趣味×	11.2%		4.2%	20.8%
家事×	45.6%		50.0%	39.6%
趣味×	14.4%		12.5%	17.0%
女性／料理	全	体	前期高齢者	後期高齢者
家事○・趣味○	53.7%		70.8%	20.0%
家事○・趣味×	11.9%		7.9%	20.0%
家事×	26.1%		18.0%	42.2%
趣味×	8.2%		3.4%	17.8%

④「友人・知人の訪問」に関しては、「週1回以上」訪問があるのは、女性の方が高く49%である。しかし、年齢別では、前期高齢者であっても後期高齢者であっても大差はない。男女とも単身同居の場合に「週1回以上」の訪問の割合が、他よりも低くなっている。

⑤家事を行う回数と趣味の有無から、活発に活動を行っているかどうかを検討する。家事は、男性で「庭や家の手入れ」を、女性で「料理」を取り上げることにする。前期高齢者では「家事もよく行い、かつ趣味もある」のは、男性が3割なのに対し女性は7割に上る。また男女ともに「家事は行いが趣味はない」という人の割合が極めて低い。後期高齢者では「家事は行いが趣味はない」のは、男女とも2割だが、女性では「家事はしないが趣味はある」人の割合が、前期高齢者に比べ高くなっている。「どちらもしない」のは後期高齢者では男女とも2割弱だが、前期高齢者では男性が12%なのに対し女性は3%と、その低さが目立っている（表2参照）。

#### 4-2. 地域内における日常生活

①日頃の外出状況を見ると「週1回以上」外出するものは、高い順に「近くでの買い物」50%>「ショッピングセンターでの買い物」33%>「病院への通院」29%>「友人宅への訪問」24%>「趣味活動」20%>「散歩」18%と続く。しかし「毎日」出かける場合に限ると「散歩」が「近くでの買い物」に次いで頻度が高くなる（図4-4参照）。

②地域行事への参加を「体育祭」「文化祭」「お祭り」でみると、必ず参加するのは「お祭り」が最も高く24%であるが、いずれの行事も「あまり参加しない」「全く参加しない」という割合が5割以上となっている。また、地域組織への参加として「老人クラブ」の加入率（「よく参加する」と「あまり参加しない」の合計）をみると、男性50%、女性62%、前期高齢者43%、後期高齢者74%であり、女性と後期高齢者の参加率が高くなっている。この内「よく参加する」のも、女性と後期高齢者で約4割となっており、この点が注目される（図4-5参照）。

#### 5. 趣味活動の実態

趣味活動では、趣味の有無、趣味の内容、始めた時期、きっかけ、誰とどこで行うか、ということを書いた。趣味の数は、内容を自由回答とすることで集計した。

##### 5-1. 趣味の有無

①何らかの趣味をもつ人は、全体で約8割となっていて、それは性別での差よりも年齢での差の方が大

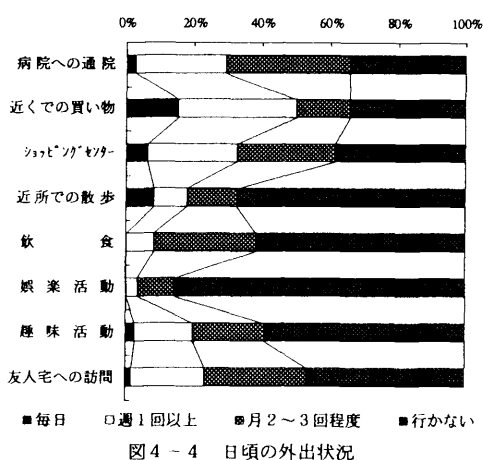


図4-4 日頃の外出状況

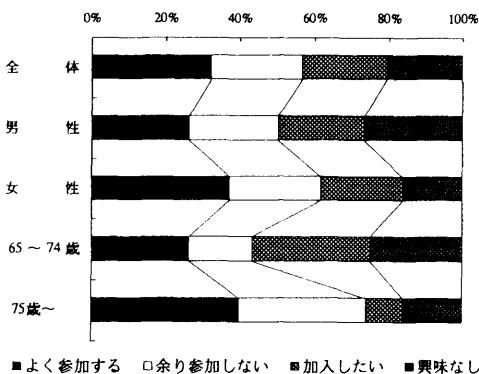


図4-5 老人クラブ

きい。前期高齢者では、86%が趣味を持っているが、後期高齢者になるとその割合は62%にまで低下している。

②就業別では、「趣味がない」のは、自由・自営・農林漁業を除いて2割弱となっている。また複数趣味の割合は、すぐ退職、再就職したが退職、自由・自営・農林漁業の順で減少していく傾向がみられるが、すぐ退職した場合をみると、その割合は57%にまで上っている（表3参照）。

③家族構成からは単身同居において、「趣味なし」が29%と多い。男性と後期高齢者では、夫婦同居とその他において、女性と前期高齢者では、高齢者のみ世帯もしくは単身同居で複数趣味の割合が高くなっており、家族型での影響は、性別や年齢によって異なってくる。また、後期高齢者の単身同居では「趣味なし」が50%と極めて高くなっている（表5参照）。

④地区ごとにみると、高齢者のみ世帯と単身同居では、中心市街地で「趣味なし」が多く、新市街地では複数趣味が多くなる傾向がみられる。しかし「夫婦同居」では2地区の間に大差はなくなる。

## 5-2. 趣味を始めた時期

①5割近くの人が「退職前」からその趣味を行っていて、その継続性がうかがわれる。

②男性と後期高齢者では、「退職前」に始めた人が55%と高くなっているが、女性や前期高齢者になると「退職後」に始めた人の割合が、男性や後期高齢者に比べ、高くなるのが特徴である（図5-1参照）。

③就業別では、一度退職して無職という場合を除いて、「退職前」から行っている人が6割前後となっている。しかし一方で、一度退職して無職の人は、「退職前」と「退職後」で区別なく行っている場合も、比較的高くなっている。

④家族構成でみると、単身同居で47%、夫婦同居で53%、その他で70%と、同居世帯において「退職前」から始めている割合が高くなっており、高齢者のみ世帯では、退職に関わらず始めている割合が相対的に高い。

## 5-3. 趣味を始めたきっかけ

①男女ともに、また前期高齢者は「1人で思い立って」始めたという割合がいずれも4割を超えて

表3 趣味の有無（その1）

		なし	1つ	2つ	3つ以上
性別／ 年齢別	全 体	22.6%	35.2%	23.0%	19.2%
	男性・全体	25.4%	34.9%	19.8%	19.8%
	65～75歳	16.4%	39.7%	19.2%	24.7%
	75歳～	37.7%	28.3%	20.8%	13.2%
	女性・全体	20.1%	35.1%	26.1%	18.7%
	65～75歳	11.2%	38.2%	25.8%	24.7%
	75歳～	37.8%	28.9%	26.7%	6.7%
就業別	現 役	16.1%	45.2%	22.6%	16.1%
	すぐ退職した	18.9%	24.3%	25.7%	31.1%
	再就職後 退職	17.4%	41.3%	19.6%	21.7%
	自由・自営	42.3%	30.8%	21.2%	5.8%
	無 職	15.2%	41.3%	28.3%	15.2%

表4 趣味の有無（その2）

		なし	1つ	2つ	3つ以上
性別／ 家族型別	男性・全体	26.4%	33.9%	19.8%	19.8%
	高齢者のみ	27.1%	37.5%	12.5%	22.9%
	単 身 同 居	40.0%	26.7%	6.7%	26.7%
	夫 婦 同 居	21.3%	34.0%	27.7%	17.0%
	そ の 他	27.3%	27.3%	36.4%	9.1%
	女性・全体	18.2%	34.7%	28.1%	19.0%
	高齢者のみ	10.8%	24.6%	35.1%	29.7%
	単 身 同 居	24.4%	34.1%	22.0%	19.5%
	夫 婦 同 居	21.9%	34.4%	34.4%	9.4%
	そ の 他	9.1%	72.7%	9.1%	9.1%

表5 趣味の有無（その3）

		なし	1つ	2つ	3つ以上
年齢別／ 家族型別	前期・全体	13.2%	37.5%	23.7%	25.7%
	高齢者のみ	13.1%	32.8%	21.3%	32.8%
	単 身 同 居	0.0%	41.7%	20.8%	37.5%
	夫 婦 同 居	19.3%	35.1%	29.8%	15.8%
	そ の 他	10.0%	70.0%	10.0%	10.0%
	後期・全体	37.8%	28.9%	24.4%	8.9%
	高齢者のみ	37.5%	29.2%	25.0%	8.3%
	単 身 同 居	50.0%	25.0%	15.6%	9.4%
	夫 婦 同 居	27.3%	31.8%	31.8%	9.1%
	そ の 他	25.0%	33.3%	33.3%	8.3%



いるが、後期高齢者では「近所の人に勧められて」始めた場合が、21%と相対的に高くなっている。

②自由・自営・農林漁業の場合、「職場の知人に勧められて」始めた人が17%で、他の就業形態と比較しても、その割合は高い。一度退職して無職であると、「近所の人に勧められて」、現役である人は「本やテレビからの刺激」が、趣味を始めるきっかけに大いに関わっているようである。

③家族構成別では、单身同居と夫婦同居で「本やテレビからの刺激」がそれぞれ14%、17%と高くなっている。

#### 5-4. 趣味を行う場所

①全体では、「自宅内」が3割強を占めている。また「公民館・集会所」や「公共施設」といった場所の利用は約4割であり、複数の施設を利用している場合もみられた。

②性別、年齢別でみると「自宅内」がいずれの場合も3割～4割を占めている。男性と後期高齢者では「友人宅・その他」で、女性と前期高齢者では「近くの集会所・公民館」で行う割合が相対的に高くなっている（図5-2参照）。

③職業別では、一度退職して無職と、ずっと無職で「集会所・公民館」の利用が高くなっている。また再就職したが無職や、自由・自営・農林漁業で「友人宅・その他」が2割強で高くなっている。

④家族構成に関しては、高齢者のみ世帯では、「自宅内で行う」割合と「集会所・公民館」で行う割合に大差はみられなかった。同居世帯の中でも「自宅内」は、单身同居で低く、その他（拡大家族）で圧倒的に多くなる。夫婦同居では「公共施設」が相対的に低いのに対し、「場所にはこだわらず」に活動している人が見受けられる。

#### 5-5. 趣味の内容

①「日本の文化」である書道、盆栽、お茶、俳句などが、全体的にみて最もよく行われている。

②男性は「健康・スポーツ」が46%、女性と前期高齢者は「音楽・芸術・文化」がそれぞれ54%、43%と高くなっている。後期高齢者になると「音楽・芸術・文化」と「健康・スポーツ」がほぼ同じくらいの割合となっている（図5-4参照）。

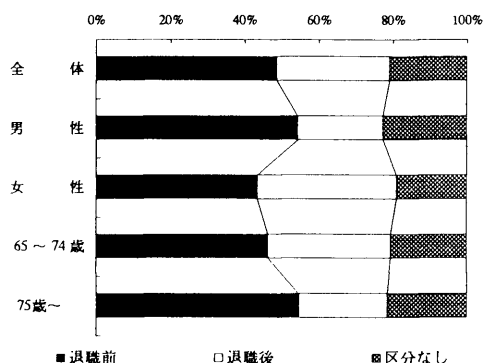


図5-1 趣味を始めた時期

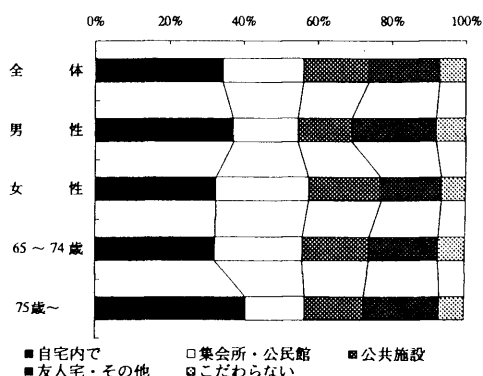


図5-2 趣味を行う場所

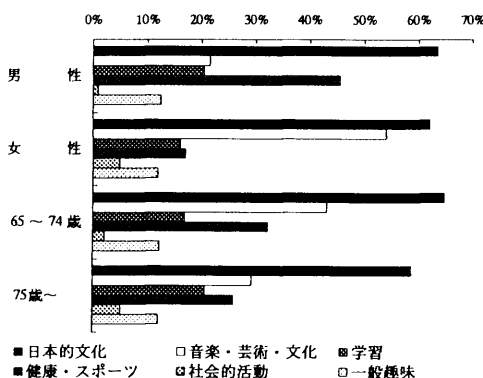


図5-3 趣味の内容

③現役では「日本的文化」（４８％）よりも「健康・スポーツ」に６１％と、高い興味が示されている。また再就職したが退職、自由・自営・農林漁業も「健康・スポーツ」に対する割合が高い。一度退職し無職や、ずっと無職であると、「音楽・芸術・文化」の割合の方が「健康・スポーツ」より高くなるのが特徴である。

## ６．グループ活動参加の実態

趣味活動や学習を充実させるために、何らかのグループ活動に参加しているかどうかを「昔から参加」「昔は参加していたが今は参加していない」「昔は参加していなかったが今は参加している」

「昔は参加していなかったが今は参加している」

「参加したことがない」の場合に分け、参加状況と参加した時期をきいている。「参加している」または「していた」人に対しては、その参加時期を「会社主催のグループ」「市などが主催の学級・講座」など７項目について記入してもらった。なお、それらを、「公共（市や公民館が主催している講座や学級）」「商業（民間のカルチャーセンターや各種学校、個人指導の稽古事）」「共同（会社主催のものや婦人会、老人クラブなど）」「自主（自主的なグループ）」の４項目に分類する。

### ６－１．グループ活動参加の状況

①「昔から参加している」人は、全体の２４％であり「昔は参加していなかったが今は参加している」ものもあわせると４６％となる。「参加したことがない」のは２６％であった。

②男性、女性とも参加状況に大差はないが、年齢別にみると、前期高齢者では現在参加している人が５割以上いるのに対し、後期高齢者ではその半数となっている。特に女性で後期高齢者では、２割弱となりその低さが顕著である（図６－１参照）。

③就業別では、現在参加しているのは、現役が圧倒的に多くて６８％であるが、再就職したが退職や、自由・自営・農林漁業では、それは３０％台にまで低下する。女性で再就職したが退職した人は、以前の参加も現在の参加も低くなっている（図６－２参照）。

④家族構成では、以前参加していた割合はどのタイプでも５割前後であるが、現在も参加しているのは

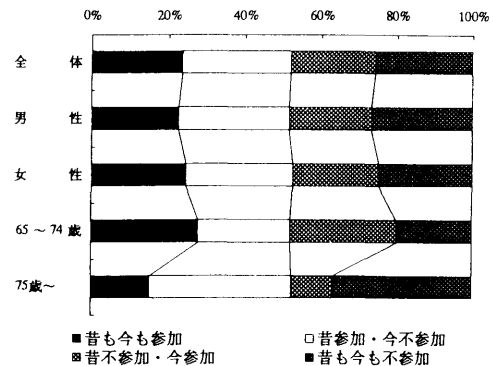


図６－１ グループ活動の参加

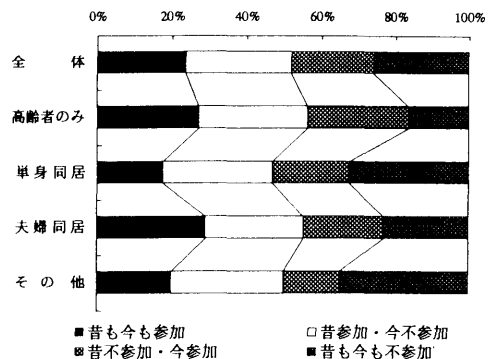


図６－２ グループ活動の参加（家族構成）

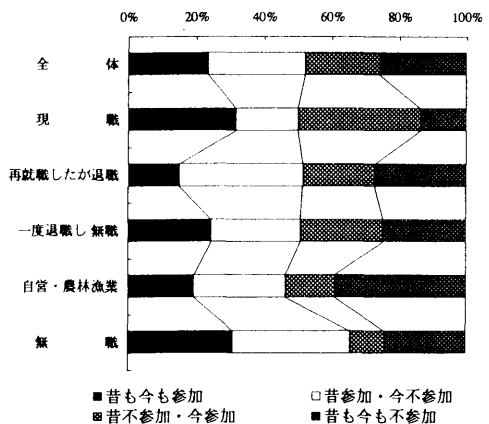


図６－３ グループ活動の参加（就業別）

高齢者のみ世帯と夫婦同居が高く、いずれも5割を超えており、逆に単身同居とその他において参加率が低くなっている（図6-3参照）。

⑤地区別にみると、高齢者のみ世帯では中心市街地で、夫婦同居では新市街地で現在参加が高くなっているが、単身同居では地区の差はほとんどない。また以前の参加をみると、同居している場合中心市街地で高く、特に単身同居で顕著である。

## 6-2. 活動内容と活動時期

①全体をみると、現在では「公共」が最も高く38%で、逆に「商業」が最も低く15%である。熟年時代、若い頃ともに「共同」が高い割合を示している。

②男性では、若い頃に目立った「共同」「自主」の参加が現在になるにつれて減少し、それに代わって「公共」の割合が高くなっている。女性では若い頃多かった「商業」の割合は減少するが、「自主」の割合は増加する傾向がみられる。現在では、割合からみると男女ともに目立った傾向はみられないが、若い頃や熟年時代には、男性で「共同」の割合が極めて高く、女性では「公共」「商業」が高いというはっきりとした傾向がみられる。また、前期高齢者では、男性と同様の傾向がみられるが、後期高齢者では、「商業」が現在になると極端に減少し、「公共」の増加が著しい。いずれの場合も「公共」の増加がみられ、高齢者の活動にとって「公共」がもつ役割は大きいことがうかがえる（表6参照）。

## 7. 趣味活動の今後の動向

ここでは今後の趣味活動の希望を、活動の内容、活動の仲間、活動の範囲において選択肢の中から選んでもらった。

①活動の内容について：全体的に「観光・娯楽」が多いのが特徴である。男性は「社会的活動」が「観光・娯楽」「健康・スポーツ」に次いで高くなっているが、女性は「健康・スポーツ」よりも「学習・教養」の割合の方が高く、「社会的活動」は相対的

表6 グループ活動への参加

		自主	公共	商業	共同
現在	全 体	16.2%	37.7%	15.3%	30.7%
	男 性	18.0%	40.0%	11.9%	30.1%
	女 性	15.0%	35.9%	17.9%	31.3%
	65～74歳	17.9%	39.8%	21.9%	20.5%
	75歳～	12.9%	33.3%	2.5%	51.3%
熟年時代	全 体	14.7%	24.4%	22.1%	39.1%
	男 性	13.7%	18.1%	13.7%	54.5%
	女 性	15.9%	31.6%	31.6%	21.0%
	65～74歳	14.4%	21.5%	24.9%	39.4%
	75歳～	15.4%	30.8%	15.4%	38.5%
若い頃	全 体	19.5%	13.1%	21.7%	45.7%
	男 性	27.6%	6.8%	10.4%	55.2%
	女 性	6.0%	23.6%	41.2%	29.2%
	65～74歳	19.9%	14.3%	25.8%	40.0%
	75歳～	18.3%	9.0%	9.0%	63.7%

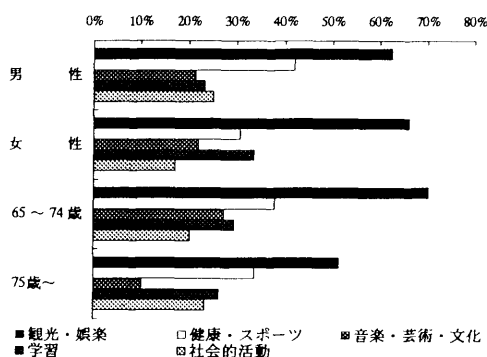


図7-1 今後の活動内容

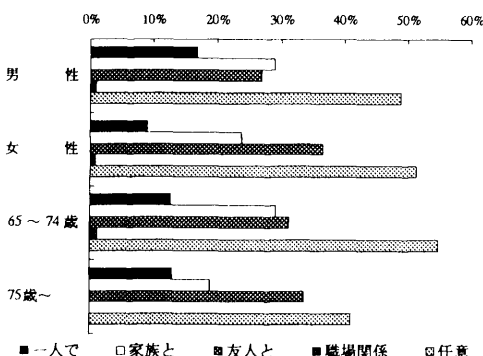


図7-2 今後の活動仲間

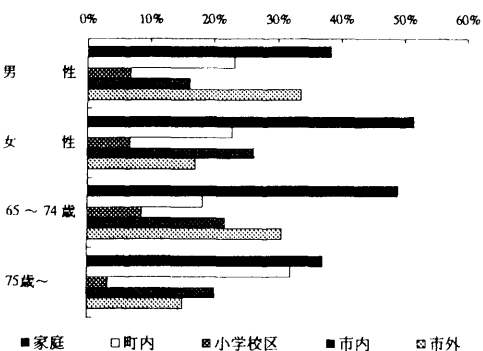


図7-3 今後の活動範囲

に低いのが特徴である。年齢でみると後期高齢者で「音楽・芸術・文化」が低い（図7-1参照）。また、単身同居と夫婦同居では「音楽・芸術・文化」が、「その他」では「学習・教養」が最も低くなっている。

②活動の仲間について：「1人」または「家族と」行いたいという場合よりも、間柄にはこだわらない「任意」の割合が性別、年齢を問わず高い割合を示している。「友人と」という場合も3割と高く、家

族活動型への希望は低いと言えよう（図7-2参照）。それは、家族構成でみても同様な傾向がみられる。しかし、夫婦同居に関しては「友人と」よりもわずかではあるが「家族と」の方が上回っている。

③活動の範囲について：「家庭内で」行いたいという場合が相対的に高いが、男性と前期高齢者では、それに続いて「こだわらない」が高くなっている。一方、女性と後期高齢者では「町内程度」と比較的狭い範囲での活動を望んでいるようである。家族構成でも、高齢者のみ世帯と夫婦同居で「こだわらない」が高くて、それ以外では狭範囲での活動の割合が高い。地区別においては、高いものから中心市街地、新市街地、周辺市街地の順で「市内」「市外」といった、広域的な範囲での活動希望が目立つ一方、新市街地では「家庭内で」、周辺市街地では「町内程度」というように地域内での活動を希望している（図7-3、7-4参照）。

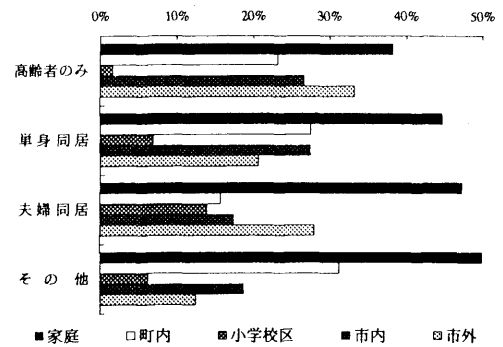


図7-4 今後の活動範囲（家族構成別）

## 8. まとめ

高齢者の「生きがい」または「自立した活発な生活」につながるものとして、趣味活動やグループ活動をとらえると、前期高齢者の方が後期高齢者よりも積極的に活動しており、特にグループ活動への参加状況は、年齢での差がよくあらわれている。しかし後期高齢者は老人クラブなど地域を基盤とした活動には、参加率が極めて高く、今後の方向性を探る上で一つの要素となるだろう。

趣味を行う場所について、近くの集会所・公民館や公共施設は、「自宅内で行う」までではないがそれに続く場所であり、活動範囲希望の「町内」と合わせて、「高齢者が気軽に集うことの出来る空間」を考える手がかりとなるであろう。

また、女性も、男性と同等か、場合によってはそれ以上に活動したり参加している様子がうかがえ、一般的に女性の社会参加が高まることは高齢者においても同じことが言え、これからの高齢社会における要求でも、十分考慮する必要があるのではないだろうか。

今後さらに研究を進めるにあたって、活動の継続性をふまえた諸条件の追求と、活動基盤となりうる施設の利用者の現在の問題点や要求などを比較、検討しながら空間の必要性について考えていきたい。